

朝日 俳壇



〈アオモジ I〉 日高理恵子

◆小林貴子選

- 春櫻むせいじ・オザワの指の先 (茅ヶ崎市) 河重 卓三
- 干したきは己代りに布団干す (南房総市) 山根 徳一
- 如月の兜太の遺影書架にあり (川口市) 青柳 悠
- どっこいしょ土を転がす路の墓 (厚木市) 北村 純一
- 嬉しさにグロップ添い寝山眠る (三鷹市) 浅野 喜弘
- 冬の月「こげちやいました」とSLIMかな (富崎県川南町) 久米まさほる
- 満作や春魁るチアガール (四国中央市) 高橋 悦子
- ブロッコリ人気赤丸急上昇 (本庄市) 篠原 伸允
- ため息のふかさにへこむくず湯かな (日立市) 加藤 宙
- 北校舎五時間目まで薄水 (神戸市) 藤井 啓子

【評】一句目、掌を広げて虚空を掴むしぐさもあつた、小澤征爾の指揮。今、その魂は春浅い天上へ、深悼。二句目、何となくしげっばい自分にさよなら。三句目は「書架」という場所が良かった。四句目は植物の力を捉え、「転がす」が的確。

◆長谷川權選

- 原発のほかは蕪村の春の海 (栃木県壬生町) あらゐひとし
- 聞きたしや子どもの声の鬼は外 (東京都大島町) 大村 森美
- 妻の居てこれ初夢と気付きけり (上尾市) 清水 昇一
- やはれし鬼をねぎらふ安来節 (新座市) 丸山 巖子
- 探梅や坊主ころびと云ふ難所 (塩尻市) 古藤 林生
- 箱舟の海苔屑曳いて帰りけり (藤沢市) 大内 菅子
- 一軒宿比良の雪解水を引く (大阪市) 今井 文雄
- 三千風の庵春めく西行忌 (八王子市) 徳永 松雄
- 俳壇に希に入選春を待つ (今治市) 横田青天子
- 春の水能登の水道魁れ (尼崎市) 田中 節夫

【評】一席。のたりのたりとはゆかぬ原発。二席。やはり子どもの声でなくては。三席。何と哀しい句。八句目。大淀三千風。その庵とは大磯の鶴立庵。十句目。阪神淡路大震災の句「春の水魁りたる蛇口かな」(稲畑汀子)を踏まえる。

◆大串 章選

- 生き生きと流るるさまに滝凍る (北茨城市) 坂佐井光弘
- 初めての囲炉裏隣に雪女 (名取市) 相澤ひさを
- 薄氷に淡き光の遊びをり (茅ヶ崎市) 藤田 修
- 雪霏霏と倒壊したる家々に (下田市) 森本 幸平
- 梅園の山なだらかに香りけり (伊万里市) 田中 南嶽
- 春立つや水脈長々と沖目指す (柏市) 藤嶋 務
- カッターに紙切り揃へたる寒さ (東京都足立区) 望月 清彦
- ひこぼえの森の記憶を引き継ぎて (日南市) 富田 隆雄
- 嘗て牛小屋かつて鶏小屋梅白し (静岡県河津町) 岩城 紀子
- 手のなかに綿虫包む日暮かな (川口市) 青柳 悠

【評】第1句。白く輝く凍滝は壮絶で美しい。まさに「生き生き」と流れる感じ。第2句。「囲炉裏」と「雪女」の取合せがユニーク。雪女の伝説を思い、ファンタジーを感じる。第3句。薄氷をいろいろ淡淡しいデザイン、「遊びをり」が良い。

◆高山れおな選

- どの窓も叫ばず冬灯ともしけり (東京都杉並区) 漆川 夕
- 巨匠近く昭和九十九年春 (岩国市) 上村 素子
- 老兵のやうな原発冬銀河 (東京都足立区) 無京 水彦
- 雪女真つ赤な息を吐きにけり (大村市) 小谷 一夫
- をりづるをほどくがどくはるのゆき (苫小牧市) 齊藤まさし
- 「皓月」は亡父の号なり冬の月 (川越市) 吉川 清子
- 黄砂吹き込める青物市場かな (京都市) 室 達朗
- 春雷や小澤征爾と擦れ違ふ (秦野市) 加藤 三眼
- 息詰めて聴けばかすかに雛の息 (秋田市) 松井 憲一
- 風光るおさなとぼほのハーモニ (東京都杉並区) 青木 公正

【評】漆川さん。「叫ばず」と言うことで、何でもない夕景に潜む「叫び」を見届けた。上村さん。小澤征爾氏追悼句多数。「昭和九十九年」の一語でその生涯を巧みに位置付けた。無京さん。原発はもちろん、多くの社会的インフラが老兵法。

うたをよむ パレスチナの歌

ガゼでは人が殺されている。けれど、その気になれば報道から目を背けることもできてしまふ。

だんだんに無感覚となる報道はウクライナからガゼに移れど 渡英子

角川『短歌』二〇二四年二月号から引いた。正直な歌だ。自分自身が無感覚となりつつあることへの批判でもある。思はねばパレスチナいま無きことし煮え湯のやうな夏のかげろふ 小島ゆかり『憂春』

ともに二〇〇〇年代の歌集から引いた。小島の歌は挑発的だ。何かを思わないことは無意識の行為だが、その無意識の時々、私たちはパレスチナを無きもののごとく扱っているのだと突きつづける。

奥田の歌には「第三次中東戦争勃発の日」と詞書がある。「我」が開戦日に生まれたのは偶然だが、短歌として書き留

めると、パレスチナの人々は同時代人として現前し、「我」の生涯はパレスチナの苦しみ時間として意識化される。歌集を読んでいると、不意にこうした未来への問いかけに出会うことがある。沙にさまざま今も幼き飢えしまな妻よたやすき悲しみはいつか 近藤芳美『黒豹』

第三次中東戦争当時の歌を引いた。過去の短歌は今日への問いかけである。今日詠まれる短歌もいざれそうなる。歌を作る際には、今日だけでなく、未来へ向けてどのような問いを投げかけるのかも問われているのだらう。(歌人)

第35回日本伝統俳句協会賞 協会賞は勝村博さん(75)=岡山県=の「阿波踊」(30句)に、新人賞は一倉小鳥さん(49)=神奈川県=の「栗紐」(30句)に決まった。

長谷川權著「小林一茶」100句を精選し、批評を加えた。「誰にでもわかる言葉、細やかな心理描写……近代俳句は一茶からはじまる」(河出文庫・880円)

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿は無地のほかき1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合があります。

風信